□鳴橋直弘（編著）：**ヘビイチゴを調べる** Naruhashi N. (ed.): **We Study Mockstrawberry** 2017. A5版. 230 pp. 認定特別非営利活動法人 大阪自然史センター. ISBN978-4-902883-14-5 C3045.

ヘビイチゴとヤブヘビイチゴ，つまり身近な植物を材料とした観察・実験書として本書を推薦したい．本書の実験については，一部を除いて，大掛かりな設備を必要とせず，いろいろな工夫が紹介されている．巻末には引用文献が網羅され，実験を進めていく上で大きな助けとなるだろう．この本は編著者の鳴橋直弘氏が富山大学に奉職されていた時に指導された学生の卒業論文や院生の修士論文がベースになっており，その詳細は本書の「後書き」に詳しく述べられている．

本書の内容を一言でいえば，「ヘビイチゴとヤブヘビイチゴは別種か，それとも同種か，同種の時はどういう関係になっているのか」（本文より）という問題意識を発端として，「これらの2種は別種と考えられるデータを得た」（同）ということが結論で，その思考過程でさまざまな観察と実験が試みられている．ヨーロッパ人研究者の中には，ここで問題とする2種が同一種であるという見解も紹介されている（例えば，Kalkman 1968, 1993）．これに対して，編著者は生きたものを見ていないからではないか，と感想を述べているが，評者も同感である．翻って，我々も国外の植物を考察するにあたって，同様の誤りに陥らないように肝に銘じたい．

問題の2種の外部形態・内部形態の比較もなかなか興味深い．ヘビイチゴの外果皮には細胞の大小があり，このため果実表面は波打ち，結果として果実には皺の存在が認められる．一方，ヤブヘビイチゴの外果皮はそのような細胞のサイズの変異はなく，表面は平滑である．さらに，アリが大顎で挟む時，果実表面の皺がホールドの役割を果たすという．評者はかつて皇居に生育するタヌキの食餌調査を行ったことがあるが，問題の2種に果実表面の皺の有無にも違いがあることには思いが及ばなかった．この他，散布を巡るキーワードとしては，エライオソーム，共人植物，二叉散布植物などがある．

評者が最も感銘を受けたのは蜜標に関する論議である．ヤブヘビイチゴには蜜標と蜜腺が共にある．一方，ヘビイチゴでは蜜標はないが，蜜腺はある．このことを端緒に編著者は言う．「蜜標は蜜腺のある場所を示しているという解釈だけでは不充分であり，この蜜標の生物学的な機能の詳細は未だ分かっていない」．評者も全く同感である．

以上，本書は身近な植物を題材としてさまざまな考察を行ったものだが，編著者の思索があちこちに散りばめられ，含蓄に富むものとなっている．一言注文をつけるとすれば，増刷の折には，是非索引を付けていただきたい．

本書は一般の書店では販売されていない．購入希望者は鳴橋直弘氏宛 (yjrqx660@ybb.ne.jp) にメールで，住所，氏名，電話番号，必要な冊数を明記して申し込むこと．1冊送料込みで2500円．

（門田裕一 Y. KADOTA）

93巻1号 正誤 (2018) Errata in Vol. 93 No. 1 (2018)

ページ (Page)	カラム (Column)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
73	left	↑ 8	1894（明治22）	1894（明治27）
5	right	↓ 6	refereble	referable